

舊交邂逅封疆近、老牧蕭條宴賞稀。書札每來同笑語、篇章時到借光輝。
 絲綸暫厭分符竹、舟楫初登擁羽旗。未知今日情何似、應與幽人事有違。

八 ① 「冬夜錢員外と同じく禁中に直す」(0191)

② 「錢員外の禁中夙に興き示さるるに和す」(0192)

③ 「白牡丹」(0031)

④ 「錢員外に和し、盧員外が早春独り曲江に遊び長句を寄せられしに答へ」(0585)

⑤ 「夜禁中の桃花を惜しみ因って錢員外を懐う」(0748)

⑥ 「錢員外が早冬禁中の菊を翫ぶに和す」(0749)

⑦ 「錢員外と同じく絶糧の僧巨川に題す」(0711)

⑧ 「絶句、書に代えて錢員外に贈る」(0712)

⑨ 「立春の日、錢員外が曲江に同行し贈られしに酬ゆ」(0739)

⑩ 「錢員外が青龍寺の上方にて旧山を望むに和す」(0740)

⑪ 「杏園に花落つる時錢員外を招きて同じく酔う」(0720)

⑫ 「錢員外と同じく禁中に夜直す」(0722)

⑬ 「錢員外の雪中寄せられしに酬ゆ」(0731)

⑭ 「重ねて錢員外に酬ゆ」(0732)

九 二人が翰林学士であった以降の詩について、詩の題のみを挙げておく。

① 「錢舎人の書もて眼疾を問うを得たり」(0797)

② 「涓村に退居し、礼部の崔侍郎・翰林の錢舎人に寄する詩一百韻」(0807)

③ 「李相公崔侍郎錢舎人に寄す」(0953)

④ 「崔侍郎・錢舎人の書にて問うに答え因って継ぐに詩を以てす」(0807)

⑤ 「龍昌上寺に登りて江南山を望み錢舎人を懐う」(0559)

⑥ 「錢虢州、三堂の絶句を以て寄せらる、因って本韻を以て之に和す」

(1167)

⑦ 「吉祥寺にて錢侍郎の名を題せるを見る」(1319)

⑧ 「錢侍郎使君廬山の草堂に題する詩を以て寄せらる、因って之に酬ゆ」(1250)

⑨ 「初めて郡齋に到り錢湖州・李蘇州に寄す」(1328)

⑩ 「錢湖州は箬下酒を以て、李蘇州は五醖酒を以て、相次いで寄せ到る。同じく飲むに因無し。聊か懐う所を詠す」(1341)

⑪ 「小歳の日、酒に對し錢湖州が寄する所の詩を吟す」(1348)

⑫ 「道宗上人に題す十韻並びに序」(3231)

⑬ 「華城西北の雉堞最も高し。崔相公首めて樓台を創り、錢左丞繼いで花果を種え、合わせて勝境と為す。題して雅篇に在り。歲暮に独り遊び、悵然として詠を成す」(3241)

⑭ 「錢左丞が再び華州に除せられしを喜び、詩を以て賀を伸ぶ」(3271)

⑮ 「錢華州の少華の清光に題する絶句に和す」(3272)

※(文)「錢徽司封郎中知制誥制」(元和八年) (1822)

一〇 (1328)・(1341)・(1348) の三首の詩参照。

一一 『旧唐書』は、可復、可及の二人、『新唐書』は、可復、方義、珣の三人を載せ、錢可復は『全唐詩』卷五四六に、「鶯出谷」の五言十二句の排律の詩一首、錢珣は卷七一二に、「江行無題」など七種、計一〇八首を採録する。

○
白居易の交友関係をめぐって、白居易が杭州刺史であった時期を取りあげ、錢湖州と李蘇州の二人に焦点を絞って論じてみた。前者の錢徽は、正史にも伝があり、白居易との交友を示す詩も三十首近くあるにもかかわらず、唐の詩人二千人以上を収録する『全唐詩』にその名が見えず、詩も収められていない。錢徽の詩は断片の二句にとどまる。李諒は正史に伝が見えず、白居易との交友を示す詩も錢徽の三分の一に満たない。しかしその名は一首詩人として、『全唐詩』に小伝とともに載せられている。実のところ、錢徽について当初はこうした事実も気づかずに、大暦の十才子錢起の息子でもあるので、資料また史料は充足していると考え、むしろ以前から抱き続けていた李諒についての疑問点を解明することが主眼であった。結論的には、錢徽についてはまったく予想外の発見であり、思わぬ誤算から生じた収穫を得たというべきであろうか。

(平成十六年一月七日)

(注)

※白居易の作品番号は、花房秀樹『白氏文集の批判的研究』所収の「綜合作品表」の番号。白居易の作品の底本には朱金城『白居易集箋校』（上海古籍出版社）を用いた。また文中に引用した丁居晦の『重修承旨學士壁記』は朱金城氏の箋によったものである。

一 『文選』卷四「三都の賦」。白居易の「閨門に登りて閑望するの詩」(295)に「曾て錢塘を賞し兼ねて茂苑を」。また「長州曲新詞(307)」に「茂苑綺羅佳麗の地」と見える。

二 陶淵明の「飲酒二十首の七」に「秋菊佳色有り、露にぬれたる 其の英を撥み、此の忘憂の物に汎べて、我が世を遺るるの情を遠くす」とある。

もとは、『詩経』邶風柏舟の毛伝からた語。

三 『新唐書』卷一七七、錢徽伝に、「遂に江州刺史に貶さる。……湖州に転ず。」とある。

四 『旧唐書』卷一六八、錢徽伝によれば、「大和二年秋、疾を以て位を辞し、吏部尚書を授けられて致仕す。三年三月卒す、時に年七十五。」とあり、生年は(七五五)ということになる。白居易の生年は大暦七年(七七十二)。

五 白居易の「白牡丹」(302)の詩に、「唐昌の玉薬花、攀翫衆の争う所」六 白居易の「買花」の詩に「帝城春暮れなんとし、喧喧として車馬度る。

共に言う牡丹の時、相随い花を買去る」、新樂府「牡丹芳」の詩に「花開き花散ること二十日、一城の人皆狂えるが如し」とある。

七 『全唐詩』卷四六三に、李諒が白居易に寄せた七言十六句の古詩一首を収録する。

蘇州元日郡齋感懷寄越州元相公杭州白舍人(自注)時長慶四年也

稱慶還郷郡吏歸、端憂明發儼朝衣。首開三百六句日、新知四十九年非。

當官補拙猶勤慮、游官量才已息機。舉族共資隨月俸、一身惟憶故山薇。

同望玉峯時 同しく 玉峰を望みし時に似たり

因詠松雪句 因って 松雪の句を詠じ

永懷鸞鶴姿 永く 鸞鶴の姿を懐う

六年不相見 六年 相見えず

況乃隔榮衰 況んや 乃ち 榮衰を隔つるをや〔自注〕

「龍昌寺」は忠州にある寺。「青龍」は長安の青龍寺のこと。「玉峯」は長安にある藍田山、玉を産するので「玉峯」の名がある。「鸞鶴の姿」は鸞や鶴のようなすぐれた容姿、錢徽をいう。忠州で、中書舎人の錢徽を懐かしみ、かつての長安での交友の相手錢徽の詩を吟詠し、二人の榮衰の差を嘆く。「六年相見えず」とあるので、この詩が作られた元和十五年（八二〇）からすれば、六年まえの元和九年（八一四）のことであり、白居易は太子左贊善大夫、錢徽は中書舎人であったが、その時から会うことなく、今は忠州刺史と中書舎人なのである。

そして、この詩の最後に白居易の「自注」がある。「昔常て錢舎人と青龍寺の上方に登り、同じく藍田山を望み、各おの絶句有り。錢の詩に云う、「偶たま上寺に来たり高きに因って望むに、松雪分明にして旧山を見る」。これは、この詩の「因って松雪の句を詠じ、永く鸞鶴の姿を懐う」とある「松雪の句」を指している。この二句「偶来上寺因高望、松雪分明見旧山」が、錢徽の唯一の詩なのである。これは先に挙げた（0740）の時の詩を指している。（〔注八〕の⑩参照）。そこで、白居易の詩また詩の題から錢徽の詩を想定してみると

白居易が錢徽の詩に〔和〕した詩

七首

白居易が錢徽の寄せた詩に〔酬〕いた詩 四首

錢徽が白居易に〔寄〕せた詩（白は吟ずる、和す） 二首

※（0559' 0740） 一首

計十四首ほどの詩を数えることができる。

さらにこの十四首の中で、錢徽の詩の題の想定できるものを挙げる

と、

◎「白牡丹」（0031）

◎「早春独り曲江に遊ぶ」（0535）

◎「早冬に禁中の菊を翫ぶ」（0749）

◎「絶糧の僧巨川に題す」（0711）

◎「青龍寺の上方にて旧山を望む」（0559）

◎「廬山の草堂に題す」（1250）

◎「三堂の絶句」（1167）

◎「少華の清光に題す絶句」（3572）
 などの八首である。しかし、当時の著名な詩人白居易との関わりを示す詩が三十首ほどあり、父は大曆の才子と称された錢起であるのに、なぜ詩の収録また詩集の編纂が行われなかったのか理由は不明で、謎である。『旧唐書』『新唐書』の伝記、丁居晦の『重修承旨学士壁記』といった史料を除けば、白居易の作品に残された足跡が錢徽の事跡を証する貴重な資料としての価値があると考えべきなのだろう。なお、錢徽には四人の子があり、うち二人は『全唐詩』に詩が採録されている。^{〔注二〕}

李の排行は、六。一児があり、名を阿武といった。永貞元年には（左・右）拾遺、元和十年には尚書郎中、長慶二年から四年までは蘇州刺史、長慶四年には兼御史中丞、大和二年には汝州刺史であったことが知られる。なお李諒には『全唐詩』に小伝があり、李諒、字は復言。官は京兆尹で終わる、という。また先に挙げた白居易の「蘇州の李中丞、元日……」の題に見える李諒の七言八韻の詩一首が『全唐詩』に収録されている。^{〔注七〕}

この他に、白居易の詩から類推できる李諒の詩は、李諒が一児阿武を詠じた詩、李諒が、白居易の「吳中の旧遊を憶う五首」に和した詩、などである。

3、白居易と錢徽（杭州刺史、湖州刺史以前）の関係

〔翰林院時代：錢徽との交友関係を示す詩〕※詩の題は^{〔注八〕}参照。

白居易 錢徽

①	元和三年	(0191)	左拾遺・学士	祠部員外郎・学士
②	々	(0192)	々	々
③	元和三年～六年	(0031)	?	々
④	々	(0585)	?	々
⑤	々	(0748)	?	々
⑥	々	(0749)	?	々
⑦	四年	(0711)	左拾遺	々
⑧	々	(0712)	々	々
⑨	四年～六年	(0739)	?	々

⑩	々	々	々	(0740)	?	々	々
⑪	々	五年	左拾遺	(0720)	々	々	々
⑫	々	々	左拾遺	(0722)	々	々	々
⑬	々	々	京戸曹	(0731)	々	々	々
⑭	々	々	々	(0732)	々	々	々

両人が、ともに翰林院の職にあった時のものは、元和三年から六年の約三年間、①～⑭の計十四首である。^{〔注八〕}

その後二人の交友は、大和三年（八三九）に錢徽が亡くなるまで続くが、翰林学士以来二十八年の歲月の間に約十四首を数えるだけである。^{〔注九〕}中で二人の交友の親密さを思わせるのは、先に挙げた錢徽が湖州刺史の時期の三首である。^{〔注一〇〕}

ここで錢徽について注目すべき詩を挙げておきたい。白居易が江州司馬から遷った忠州刺史の時の作である。

登龍昌上寺望江南山懷錢舍人 (0529)	龍昌上寺に登り、江南の山を望み、錢舍人を懷う
騎馬出西郭	馬に騎りて 西郭を出で
悠悠欲何之	悠悠として 何くに之かんと欲する
獨上高寺去	独り 高寺に上り去り
一與白雲期	一に 白雲と期す
虛欖晚蕭灑	虚欖 晩に蕭灑
前山碧參差	前山 碧參差
忽似青龍閣	忽ち 青龍の閣

ここで、これまで錢徽及び李諒の関係について述べて来たことを整理しておく。

1、杭州時代の白居易、錢徽、李諒の関係

①長慶二年十月	(1328)	白居易	錢徽	李諒
②々々	十月以後 (1341)	白居易	杭州刺史	湖州刺史
③々々	三年十二月 (1348)	白居易	杭州刺史	湖州刺史
④々々	四年 (1391)	白居易	杭州刺史	蘇州刺史
⑤々々	四年一月 (9325)	白居易	杭州刺史	蘇州刺史

この後、白居易は五月に太子左庶子に任ぜられて、五月末に杭州を去る。

2、白居易と李諒（杭州刺史、蘇州刺史以前）の関係

①永貞元年春	(923)	白居易	李諒
②々々々	(934)	校書郎	校書郎
③元和十年	(902)	白居易	拾遺
		江州途次	尚書郎中

この後、1の①、②、④、⑤に挙げた詩がある。さらに、白が杭州を去り、李が蘇州を去って以後、再び李諒との交友が詩に現れるのは次の詩だが、この詩は李諒との交友を示す最後の詩でもある。

重答汝州李六使君見和憶吳中舊游五首 (937)

重ねて汝州の李六使君が吳中の旧游を憶う五首に和せらるる

に答う

爲憶娃宮與虎丘 娃宮と虎丘とを憶うが為に

玩君新作不能休 君が新作を翫んで 休む能わず

蜀牋寫出篇篇好 蜀牋写し出して 篇篇好く

吳調吟時句句愁 吳調吟ずる時 句句愁う

洛下林園終共住 洛下の林園 終に共に住せん

江南風月會重游 江南の風月 会ず重ねて游ばん〔自注〕①

由來事過多堪惜 由來 事過ぐれば 多くは惜しむに堪えたり

何況蘇州勝汝州 何ぞ況んや蘇州の汝州に勝れるをや〔自注〕②

①先與李六有此二句之約

(先に李六と此の二句の約あり)

②李前刺蘇州故有是句

(李、前に蘇州に刺たり、故に是の句あり)

詩の題によれば、李諒は汝州刺史であり、白居易が作った「吳中の旧遊を憶う五首」の詩に、李諒が和した詩を作った。それに答えたのがこの詩であり、大和二年(八二八)、白居易が刑部侍郎の時の作とされる。ただし、白のものと詩も、李が和した詩も伝わらない。この詩には、2箇所に自注①、②があり、①によって、江南の地での再会②によって、李諒が汝州刺史の前に蘇州刺史であったので、汝州より蘇州の方がはるかに景勝の地であることを知っていることを、白居易は示した。李諒との交友関係はこの詩で終わりを告げる。

李諒との詩は以上の八首である。正史に伝を載せない李諒について、白居易の詩から分かる李諒の事跡を整理しておくならば、

我が身を悲観し、この詩を詠じたもの。白居易には当時八歳になる娘の阿羅がいた。

次の詩は、李諒の寄せた七言十六句の古詩に対して、同じ型式による答詩である。

蘇州李中丞以元日郡齋感懷詩寄微之及予輒依來篇七言八韻走筆奉答兼呈微之（2325）

蘇州の李中丞、元日郡齋感懷の詩を以て微之及び予に寄す。

輒ち來篇七言八韻に依り、筆を走らせて奉答し、兼ねて微之に呈す

白首餘杭白太守	白首	余杭の白太守
落拓拋名來已久	落拓	名を抛って來已久し
一辭渭北故園春		一たび渭北故園の春を辭し
再把江南新歲酒		再び江南新歳の酒を把る
杯前笑歌徒勉強		杯前の笑歌 徒らに勉強し
鏡裏形容漸衰朽		鏡裏の形容 漸く衰朽す
領郡慚當潦倒年	領郡	潦倒の年に当たるを慚じ
鄰州喜得平生友	鄰州	平生の友を得たるを喜ぶ
長洲草接松江岸	長洲	草は接す 松江の岸
曲水花連鏡湖口	曲水	花は連なる 鏡湖の口
老去還能痛飲無		老い去って 還た能く痛飲するや無や
春來曾作閑遊否		春來たつて 曾ち閑遊を作すや否や
憑鶯傳語報李六		鶯に憑り語を伝えて 李六に報じ

情鴈將書與元九 雁を倩い書を將て 元九に与う

莫嗟一日日催人 嗟く莫かれ 一日 日人を催すを

且貴一年年入手 且つ一年 年手に入るを貴はん

詩の題に「蘇州の李中丞」とあるので、李諒は蘇州刺史、御史中丞の官にあり、蘇州に赴任していた。「郡齋」つまり刺史の官舎での感懷の詩を寄せたのである。「微之」は元稹のことで、この時御史大夫・浙東觀察使・越州刺史の官にあり、越州にいた。白は杭州、李は蘇州、元は越州、三人は近隣の州にいたのであった。「一たび渭北の故園を辭し、再び江南の新歳の酒を把る」の句により、故郷を離れてから二度目の新年の酒、すなわち長慶二年十月に杭州刺史となって以来、二度目長慶四年の正月を意味し、それは同時にこの詩の作られた時期でもある。「長州草は松江に接し、曲水花は連なる鏡湖の口」の句は、三人の在任地が近いことをいう。「長州」は最初の詩に見えた「茂苑」のこと、李諒のいる蘇州にあり、「松江」は吳松江、蘇州に近い。「鏡湖」は元稹のいる越州の湖である。年をとつても、ともに痛飲し、新春にも、ともに閑遊できるかどうか、なれば蘇州までは春の鶯に伝言を、少し遠い越州には雁に便りを運ばせよう、と、「一年一年、老衰を増すと嘆かず、年を得ることを貴重たとしよう」との詩を二人に贈った。

○白居易・錢徽・李諒の相互關係

十年後である。元和十年（八一五）、四十四歳、白居易が江州司馬に左遷されその地に向かう道中において作られた詩である。

獨樹浦雨夜寄李六郎中（0902）

獨樹浦にて雨夜李六郎中に寄す

忽憶兩家同里巷 忽ち憶う 兩家 里巷を同じうせんことを
何曾一處不追隨 何ぞ 曾て 一処か追隨せざらん

閑遊預算分朝日 閑遊 預め算す 分朝の日

靜話多同待漏時 靜話 多く同じうす 待漏の時

花下放狂衝黑飲 花下に放狂して 黒を衝きて飲み

燈前起坐徹明棋 燈前に起坐して 明を徹して棋す

可知風雨孤舟夜 知るべし 風雨孤舟の夜

蘆葦叢中作此詩 蘆葦の叢中 此の詩を作るを

詩の題の「獨樹浦」の所在は、長安から江州に至るまでのどこかの渡し場であろう。その時、李諒は「郎中」つまり「尚書省郎中」であった。初めの二句によれば、李諒は白居易と同じ昭国里に住んでいたらしい。この詩によれば、行楽も登庁も、飲酒も下棋も、常に行動を共にした仲であったという。肝胆相照らす仲ゆえ、江州左遷の途次、風雨の夜孤舟に身を託し、蘆葦の叢のなかでこの詩を作った私、白居易の心境が分かるはずだ、という詩意は、李六郎中との関係の親密さを思わせる。

先の二首は、李諒は「拾遺」（左・右）、白居易は校書郎、この詩は李諒は尚書省郎中、白居易は江州司馬、後者は別としても李諒のほう

が上位の官にいる。ちなみに、從八品上と正九品上、從五品上と正六品下の官である。李諒のほうがやや年輩であったのではないだろうか。これらの三首によって、李諒が永貞元年には（左・右）拾遺、元和十年には尚書郎中であったこと、最初に挙げた二首によって、長慶二年には蘇州刺史であったことが分かる。白居易との接触による結果得られたものである。

さらに錢徽と同じく蘇州刺史李諒との交友を示す詩は他にも二首あり、一首は李蘇州の詩に感じて詠んだもの、もう一首は、元日に李諒が七言八韻の感懐の詩を白居易と元稹に寄せたので答詩を贈り、元稹にも呈上したものである。兩詩ともに長慶四年（八〇四）の作で、白居易はまだ杭州刺史の任にあった。その二首を次に挙げるならば、

見李蘇州示男阿武詩自感成詠（1391）

李蘇州の男阿武の詩を示すを見、自ら感じて詠を成す

遙羨青雲裏 遙かに羨む 青雲の裏

祥鸞正引雛 祥鸞 正に雛を引くを

自憐滄海畔 自ら憐れむ 滄海の畔

老蚌不生珠 老蚌 珠を生ぜざるを

詩の題によれば、李蘇州の息子の阿武が作った詩を見せられての作で、息子を持たない白居易の羨む心情を述べている。「祥鸞」は瑞鳥、李諒にたとえたもの。「滄海」は海のこと、最初の詩にも「俱に滄海郡に來たり」とあった。「老蚌」は老いたはまぐり、老妻にたとえた。このような詩を作る息子を持ったのが羨ましく、老妻が息子を生まな

くなり、李六、崔二十六の兩人を招いたのである。招待状は書面ではなくこの詩であった。「唐昌」は唐昌觀のこと、朱雀門街の西、第一街の安業坊にあった道觀。^{〔注五〕}「玉蘂」は玉蘂花、唐代に珍重された花で、唐昌觀は玉蘂花の名所であった。「崇敬」は寺の名、朱雀門街の東、第二街靖安坊にあった尼寺。牡丹の名所の一つ。唐代では慈恩寺や西明寺が牡丹の名所として名高い。牡丹の花の盛りの時期は、三月十五日ごろから晩春にかけてであり、開花の期間は二十日ほどである。^{〔注六〕}

玉蘂花が散り過ぎ、牡丹の花の時節が到来した、その時の作ということになるので、校書郎の職を辞し制科の試験を目前にした元和元年とは考えられず、同時に「半月芸香の俸」すなわち校書郎の半月分の俸給、それを「帰糧」すなわち帰郷用の食糧（かて）にせず、「酒費」すなわち酒代にしよう、というのだから、校書郎在任中ということになる。先の「桃花」の詩と同じく永貞元年と考えるのが妥当であろう。なお詩の題に見えるもう一人の「崔二十六先輩」についてはまったく不詳である。

白居易が「桃花」、「牡丹」の時節に、招いて共に酒を飲んだ李六が、初めに挙げた詩の李蘇州と同一人物ではないかと考えられている。

その抛り所とされるのは、元稹の「孤山永福寺の石壁の法華経記」に「凡そ錢を経に輸すこと、貴き者は御史中丞・蘇州刺史李諒の若きもの有り」とあるのと、『全唐詩』卷四六三、李諒の項に、「蘇州の、元日郡齋にての感懷を越州の元相公・杭州の白舍人に寄す」という詩が採録されており、その原注に、「時に長慶四年なり」と記している。^{〔注七〕}

そしてこの『全唐詩』の詩人小伝に、「李諒、字は復言。三たび劇縣を宰り、再び郡牧と為る。京兆尹に終わる。詩は一首。」という李諒のささやかな伝記を載せる。この二つが、李蘇州、李諒、字は復言、を結びつける抛り所である。

また柳宗元の「王戸部の爲に李諒を薦むる表」に、「臣、度支等の副使に任せられてより、（李）諒を以て巡官と為すも、未だ薦聞に及ばず。……伏して天恩を望み、授くるに諫官を以てし、献納に備えしめんことを」とあること、さらに『冊府元龜』に「李諒左拾遺と為る。元和二年、……交遊猥雜なるを以て、……諒貶されて澄城県令と為る」（卷四八一、台省部譴責の項）の記事によって、李諒が左拾遺、また元和二年に澄城県令に貶されたことの証とする。

先の、「桃花」また「牡丹」觀賞を兼ねた飲酒への招待の二首の詩は、詩の題に「李拾遺」「李六拾遺」とあり、李諒が（左・右）拾遺の時期である。

錢徽は、『旧唐書』『新唐書』に伝を載せるが、李諒は、兩唐書に伝が見えず、『全唐詩』の小伝のみである。現在残されている作品は、李諒は『全唐詩』に詩一首を採録されているが、錢徽は『全唐詩』に一首の詩も採録されていない。

最初に挙げた「初めに郡齋に到り……」（〔338〕）の詩を贈った相手、李蘇州と錢湖州の兩人と白居易との最初の出会い、兩人の身上については、このような違いがある。

李諒との最初の出会いの後、次に李諒との接触が詩に現れるのは、

白居易が李諒と初めて出会ったのは、恐らく白居易と錢徽との出会いよりも少し早い時期で、永貞元年（八〇五）もしくは元和元年（八〇六）、白居易が長安の永崇里にあった道観の華陽観に寓居していたころである。その時の詩が次に挙げる七言絶句である。

華陽観桃花時招李六拾遺飲（0633）

華陽観の桃花の時、李拾遺を招いて飲む

華陽観裏仙桃發

華陽観裏 仙桃開く

把酒看花心自知

酒を把り花を見て 心自ら知る

爭忍開時不同醉

争でか忍びん 開時酔を同じうせざるに

明朝後日即空枝

明朝後日 即ち空枝たらん

ただし、二人の出会いが永貞元年であれば、白居易は二年前に親友元稹とともに書判拔萃科に及第し、そろって秘書省校書郎に任じられ、華陽観に寓居していた時となる。翌年の元和元年（永貞二年）であれば、校書郎を辞して元稹等と華陽観にこもり、制科の試験を目指して猛勉強に励んでいた時である。なお制科に及第したのは、四月十三日、元稹が第三位、白居易が第四位であり、元稹は左拾遺、白居易は監御史となる。

桃花の開花の時節は二月、白居易の当時の状況等から考えれば、桃花観賞の精神的余裕は、目前に受験を控えた時期よりも、校書郎の身で行楽の時節を謳歌できる前者の永貞元年の方がより適しているのではないかと考えるならば、李諒との交友は錢徽よりも三年前に始まっていたと言えるだろう。

詩の題にある「李六」が、先に挙げた李蘇州、李諒だといわれる。「六」は排行。「拾遺」は官名であり、左拾遺ではなかったかと思われる。

この「李六」を、先の詩と同じように招待した詩がある。観賞するのは桃ではなく牡丹だが、花見酒を飲もうとの誘いは同じ趣向である。

自城東至以詩代書戲招李六拾遺崔二十六先輩（0634）

城東より至り、詩を以て書に代え、戯れに李六拾遺・崔二十六先輩を招く

青門走馬趁心期

青門 馬を走らせて 心期を趁う

惆悵歸來已校遲

惆悵 歸來 已に校よ遅し

應過唐昌玉藥後

応に 唐昌玉藥の後を過ぎ

猶當崇敬牡丹時

猶お 崇敬牡丹の時に当たるべし

暫遊還憶崔先輩

暫く遊び 還って憶う 崔先輩

欲醉先邀李拾遺

酔わんと欲して 先ず邀う 李拾遺

尚殘半月芸香俸

尚お残る 半月芸香の俸

不作歸糧作酒費

歸糧と作さずして 酒費と作す

この詩は、先の「桃花観賞」の詩と同じ時期に作られたものと思われる。「城東」は長安城の東、「青門」は長安城の東南の門、漢代は覇城門と呼ばれた。門の色が青いので青城門、また青門という。「心期」は心に期する所、ここは心の友をいうのだろう。長安城の青門から馬を駆って友人を訪うたのに、会えずがっかりして遅くなってから帰宅し、この牡丹花の盛りの時節に、懐中の有り金をはたいて酒を飲みた

進士の試験をめぐる事件がもとで江州刺史に貶され、ついで湖州刺史に転じ、號州刺史に遷る。

ただし錢徽が湖州刺史となった日時ははっきりしない。というより湖州刺史に転じたことを記すのは『新唐書』の錢徽の伝だけである。^{注三}

左遷の地江州から、湖州へ、いったん長安に還り、工部侍郎となるがまた華州刺史に転出する。穆宗の長慶年間の錢徽は正しく不遇の身であった。初めに挙げた二首の詩は、錢徽が湖州刺史であったことを証するものだが、実はこの二首の他に湖州刺史錢徽のことを詠んだ白居易の詩がもう一首ある。それは、小歳の日に錢湖州から贈られた詩を酒を飲みながら吟じ、作ったという、次に挙げる五言律詩である。

小歳日對酒吟錢湖州所寄詩（13c）

小歳の日、酒に対し錢湖州が寄せし所の詩を吟ず

獨酌無多興 独り酌みて 多興無し

閑吟有所思 間吟して 所思有り

一盃新歲酒 一杯 新歳の酒

兩句故人詩 兩句 故人の詩

楊柳初黃日 楊柳 初めて黄なる日

髭鬚半白時 髭鬚 半ば白き時

蹉跎春氣味 蹉跎たり 春の氣味

彼此老心知 彼此 老心知る

詩の題にいう「小歳」は、「臘」の翌日のこと。「臘」は冬至の後の

第三の戌の日。白居易がこの詩を作ったのは、長慶三年（八二三）で

ある。長慶三年癸卯は、十一月十三日（癸亥）が冬至で、冬至の後の第三の戌、十二月十八日（戊戌）が臘であり、臘の翌日つまり小歳は十二月十九日であり、この日に詩が作られたことになる。しかし、白居易がこの詩を作るに際して、吟じたという錢徽から寄せられた詩は残っていない。

独酌の酒はうまくもないが君の詩を吟ずれば思う所がある。「故人」は古なじみの友、錢徽。新年の酒、また柳の黄の新芽が出る新春も間近、ごましおまじりの半白の髭鬚で、躓いた人生の春の気分は「彼此」きみ、錢徽と、この、白居易の老人の心だけには分かるのだ、と、都から遠方の地方官となっている者同士との共有する心情を述べている。

最初に挙げた李蘇州、錢湖州の二人を対象とした二首、そして錢湖州個人を詠んだこの一首、合わせて三首の詩は錢徽が湖州刺史であったことを確実に示している。史料ではたどれぬ事跡が、白居易の詩を傍証として証明される一例である。

先に述べたように、その後錢徽は都に還り工部侍郎となるが、また華州刺史として地方に転出する。長慶・宝曆年間の錢徽は大半が地方官の身であった。穆宗が崩じて後、文宗の大和元年（八二七）、尚書左丞となるが、十二月に再び華州刺史として転出する。そして翌年注四には吏部尚書で致仕、その翌年の三月に七十五歳で亡くなる。

○白居易と李諒

翰林学士の官にあり、三月ほどおくれて、錢徽は祠部員外郎・翰林学士に除せられ、二人が翰林院の同僚となった時期であった。白居易の錢徽との初めての交友関係は、次に挙げる二首によって知ることができ

冬夜與錢員外同直禁中 (0191)

冬夜錢員外と同じく禁中に直す

夜深草詔罷 夜深けて 詔を草し罷み

霜月凄凜凜 霜月 凄として凜凜たり

欲臥煖殘盃 臥せんと欲して 殘盃を煖め

燈前相對飲 燈前に 相對して飲む

連鋪青縑被 連ね鋪く 青縑の被

對置通中枕 對へ置く 通中の枕

髣髴百餘宵 髣髴たり 百余の宵

與君同此寢 君と 此の寢を同じうす

和錢員外禁中夙興見示

錢員外の禁中夙に興き示さるるに和す (0192)

窗白星漢曙 窓は白し 星漢の曙

窗暖燈火餘 窓は暖なり 燈火の余

坐卷朱裏幕 坐ながら 朱裏の幕を巻き

看封紫泥書 紫泥の書を封ずるを看る

盲盲鐘漏盡 盲盲として 鐘漏尽く

腫腫霞景初 腫腫たる 霞景の初

樓臺紅照耀 樓台 紅照耀し

松竹青扶疏 松竹 青扶疏たり

君愛此時好 君 此の時の好きを愛し

迴頭特謂余 頭を迴らして 特に余に謂う

不知上清界 知らず 上清界

曉景復何如 曉景 復た何如と

二首ともに、元和三年(八〇八)の作であり、前の詩の「夜深けて詔を草し罷み」、「青縑の被」、「通中の枕」、後の詩の「朱裏の幕を巻き、紫泥の書を封ずるを看る」などの句は、翰林学士として宿直した夜、また夜明けの場景を表現した詩である。

当時、白居易は三十七歳、錢徽は白居易より十七歳年長なので五十歳ということになる。

白居易は元和六年(八一二)、母の喪に服して故郷の下邳に退居するまで三年半、錢徽は元和十一年(八一六)、淮西討伐に関する上疏が憲宗の怒りに触れ罷免されるまでの約十年間、翰林学士の職にあり、白居易は校書郎から京兆府戸曹參軍、錢徽は祠部員外郎から中書舎人の官にあった。二人が同時に翰林院にいたのは、白居易が翰林学士の職を辞するまでの二年半ほどで、この当時、白居易は錢徽と親密な交友また詩友関係にあった。白居易と錢徽との関係を示す詩は三十首近いが、翰林学士時代のものが半数をこえている。(これについては、後に示す)

次いで、錢徽は、穆宗の長慶元年(八二二)に礼部侍郎となるが、

寄與江城愛酒翁

寄せて 江城の愛酒翁に与う

鑑脚三州何處會

鑑脚の三州 何れの処にか會せん

甕頭一盞幾時同

甕頭の一盞 幾時にか同じうせん

傾如竹葉盈樽綠

傾くれば 竹葉の如く 樽に盈ちて緑に

飲作桃花上面紅

飲めば 桃花と作り 面上りて紅なり

莫怪殷勤最相憶

怪しむ莫かれ 殷勤に最も相憶うを

曾陪西省與南宮

曾て 西省と南宮とに陪せり

この詩が詠まれたのは、この年の十一月か十二月、歳末までの間ではないかと思われる。詩には二種類の名酒が登場する。錢湖州、徽は湖州の名酒、箬下酒を、李蘇州、諒は蘇州の名酒、五醖酒を相次いで送って来たが、いっしょに飲めないで、感懐を詠んだという。「箬下酒」は、箬溪の水で醸造した酒。「五醖酒」は、水に麴米を五日間、毎日一度醖（投）じて熟成させるので名づけられたもの。「忘憂の物」は陶淵明の「飲酒の詩」の言葉を使ったのだが、^{注二}錢徽の現状つまり後に述べる江州刺史に始まる地方流浪の失意の生活に対する「忘憂」を意識したものであろう。「江城の愛酒翁」は杭州刺史の酒好きのじいさん、白居易自らをいう。「鑑脚の三州」とは、酒のかんをする三本足のなべ（鑑）のような位置にある、湖州・蘇州・杭州の三州のこと。これでは会することも、飲むこともままならない。傾けると、「竹葉」酒のように緑いろをして、樽に満ち、飲むと桃花のように顔があかくなる。かつては西省や南宮で侍したなから、深く君たちのことを思うのを怪しまないでほしい、と、折角の酒を一同に会して飲む場

所も、飲むときも無いと嘆く。「西省」は中書省、「南宮」は尚書省の吏部のことだが、白居易がこの二人と西省もしくは南宮で勤務していたことについては時期的にずれがあり、事の真偽は定かではない。

この二首の詩は、白居易が杭州刺史在任中に、錢徽は湖州刺史、李諒は蘇州刺史として、三人が今江南の地にいること、都長安では極めて親しい旧知の間柄であったことを示している。ただ、錢湖州と李蘇州はともに白居易の若き日の友人ではあるが、この両者のそれぞれ当人自身の身上には違いがあり、それは白居易との交友関係を通して知ることのできる面がある。この両者のそれぞれと、白居易との関係について次に述べておきたい。

まずこの二首の詩の題に見える、錢徽と李諒はどちらも錢徽の名が先に、李諒が後という順序になっており、かつ詩の中でもこの両者の順序は変わらない。「初めて……」の詩も、錢徽の「雪溪」を先に、「錢湖州……」の詩も「勞するに箬下忘憂の物を以てし」と錢徽を先にする。これは恐らく長幼の序であろうと思われる。李諒の年齢は未詳だが、錢徽は白居易よりはるかに年長者であり、李諒の年齢は白居易とほぼ同年ではなかったかと推定される。

○白居易と錢徽

それでは、まず錢徽と白居易との関係から述べる。この両者の初めての出会いは、元和三年（八〇八）、白居易は都長安にあって左拾遺・

初めて郡斎に到り、銭湖州・李蘇州に寄す〔自注〕①

俱來滄海郡 俱に滄海郡に來たり

半作白頭翁 半ば 白頭の翁と作る

謾道風煙接 謾に道う 風煙接わると

何曾笑語同 何ぞ 曾て 笑語同じからん

吏稀秋稅畢 吏 稀にして 秋稅 畢わり

客散晚亭空 客 散じて 晚亭空し

霽後當樓月 霽れて後 樓に當たる月

潮來滿座風 潮來たりて 座に滿つる風

雪溪殊冷僻 雪溪 殊に冷僻

茂苑太繁雄 茂苑 太だ繁雄

唯此錢塘郡 唯だ 此の錢塘郡

閑忙恰得中 閑忙 恰も中を得たり

①聊取二郡一晒、故有落句之戲

(聊か二郡の一晒を取り、故に落句の戲有り)

詩の題に「初めて郡斎に到り……」とあるので、杭州着任早々、すなわち十月上旬に作られている。詩を贈呈した相手は、銭湖州及び李蘇州の兩人であり、ともに白居易の若きころ、三十代半ばのころの、都長安での友人であった。銭湖州は錢徽、李蘇州は李諒と言い、この兩人に対して着任の挨拶の詩を贈った。五言排律は正式の挨拶に極めてふさわしい詩型である。また詩の題に付された、白居易自らが施した注(以下、自注と呼ぶ)に、「少しばかり、湖州・蘇州の二郡の刺

史の一笑を得るために、最終の句に戯れ言を呈した」とあることから、白居易を含めたこの三人の交友関係の親密さがうかがわれる。

「滄海郡」は、海に近い郡、つまり湖州・蘇州・杭州の郡を意味する。お互いに白髪頭の年での地方勤務で、風煙の接する近隣だと言うが、ともに笑いかつ話せる距離ではなく、杭州の地ははや秋の収穫も終わり人影もまばらな冬の到来の時節だという。「雪溪」は溪水の名で、別名を苕溪水ともいう。浙江省吳興県にあり、ここでは湖州を指す。「冷僻」はさびしいうらぶれた僻地、田舎をいう。錢徽のいる湖州。「茂苑」は蘇州にあり、長州苑とも言われる。西晋の左思の「吳都の賦」に「朝夕の溶池を帯び、長州の茂苑を佩す」と見え、白居易の詩にもある。^{〔注二〕}繁華な都会、李諒のいる蘇州をいう。「錢塘郡」は白居易のいる杭州、のこと。この詩が作られた長慶二年十月の時点において、錢徽は白居易が「雪溪殊に冷僻」と称する湖州の刺史、李諒は、白居易が「茂苑太だ繁雄」と称する蘇州の刺史、そして白居易は「閑忙の中を得た」、暇も忙しさもほどほどの新任の杭州刺史だと、冗談めかした句で締めくくっている。

次の一首は七言律詩で、先の詩と同じ年の作だが、錢徽と李諒から送られた酒を前に、所懐を述べたものである。

錢湖州以箬下酒李蘇州以五醖酒相次寄到無因同飲聊詠所懐

錢湖州は箬下酒を以てし、李蘇州は五醖酒を以てし、相次いで寄せ到る。同じく飲むに因無し。聊か懐う所を詠ず(341)

勞將箬下忘憂物 勞するに 箬下忘憂の物を將てし

李蘇州刺史及び錢湖州刺史との交友関係について考えるところを述べ、白居易の交友関係図の様相が一つではないことを提起したい。この二人は、これまで取りあげてきた交友相手とは聊か趣を殊にするところがある。

○白杭州刺史・錢湖州刺史・李蘇州刺史

白居易が杭州刺史に除せられたのは、長慶二年（八二二）、七月十四日のことだが、汴河が通行止めのために、江州經由で杭州に到ったのは、十月一日であり、任地到着までに約三か月の日数を要した。初秋に長安を出発して到着した時はすでに時節は冬であった。この時から、長慶四年（八二四）の錢塘湖修築後の五月に太子左庶子に任ぜられ、月末にこの地を去る日まで、在任期間一年十か月、実際に滞在したのは一年七か月であった。この期間に刺史として公的に成した業績も大であったが、この江南を代表する地で詩人として想像以上のものを得ている。江南の好風景と称される四季折々に変化する風光明媚な環境での生活は、作詩の題材と目的に新しい発見をもたらした。たとえば、その代表的なものには西湖を中心とする一連の詩作がある。こうした、首都長安からまた東都洛陽から遠く離れた杭州で、刺史として公務に励むかたわら、私生活ではどのような交友関係を持ちながら日々を過ごしていたのだろうか。

ところで、白居易が生涯の中で地方勤めをしたのは、忠州を除いて

は三箇所、三回であり、唐の詩人の中では数多いとは言えない。同時期の韓愈、元稹、柳宗元などは、はるかな遠隔地、僻地に左遷され、中には都長安に戻れずにその地で生を終えた者もいる。官僚であることと文を作り詩を作ることが表裏一体の社会体制の中では、前者が運を決する重要な「かき」であり、悲惨な環境と境遇に遭遇するのは本人の意志いかんに関わらず避けられない運命であった。

それに比して白居易の三箇所、三回の地方官の経歴は、白居易自身の意識は別にして、客観的には過酷とは言いがたい。元和十年（八一五）の江州司馬、長慶二年（八二二）の杭州刺史、そして宝曆元年（八二五）の蘇州刺史は、今の江西省九江市、浙江省杭州市、江蘇省蘇州市であり、いわゆる江南の地に含まれる所であり、最果ての極地ではない。が、白居易にとって江州は特別であり、他の二箇所の杭州、蘇州とはまったく違う意味を持っていた。言うまでもなくそれは左遷の地であり、冤罪による屈辱的な追放先であった。この事實は、白居易にとって精神的あるいは心理的に受け入れがたい特殊な事情が存在していた。この三箇所において作られた作品には、そうした事情が形となり影となって影響を及ぼしている。

まず初めに、白居易が李蘇州、錢湖州の二人に寄せた詩を挙げ、説明を加えておくことにする。最初の一首は次の五言排律詩である。この五言十二句の詩は、長慶二年（八二二）、五十一歳の時に作られたものである。

初到郡齋寄錢湖州李蘇州（1328）〔自注〕①

Bai Jyu yi's Companionship, especially with Qian Huzhou and Li Suzhou

Fumiko NISHIMURA

キーワード

- ① Bai Jyu yi (白居易) ② Qian hui (錢徽) ③ Li liang (李諒)
④ Suzhou (蘇州) ⑤ Hangzhou (杭州) ⑥ Huzhou (湖州)

Abstract:

Bai Jyu yi did not excel in his role as an administrator in Huzhou of Jiangnan district. The beautiful landscape as well as his companions inspired him and provided him with a nearly inexhaustible source of creativity. This essay aims to clarify how his literary circle-especially Qian Huzhou and Li Su zhou-influenced him.

白居易の交友関係

錢湖州・李蘇州との関係を中心として

西村 富美子

○はじめに

白居易は、長安及び洛陽以外に、官吏として赴任した土地で、任期までの滞在中にそれぞれその地で交友関係を持ちながら充実した生活を送っていた、というより人間関係を築くことを日々の生活の重要な事柄としていたと思われる節がある。

筆者は、白居易の交友関係について関心を持ち続けてきた。それは白居易の文学の根底には、人間に対する関心が大きな要素を占めているのではないかと思われるからであり、換言すれば唐の詩人の中では特異としか言いようのない、詩文を合わせて三千八百篇の作品の膨大な量、元和十年(八一五)、左遷の地江州で始まり、以後七十五歳で生涯を終える会昌五年(八四五)の前の年に七十五巻の詩文集を完成するまで、数回にわたる詩文集編纂に見られる作品を残そうとした執念、それらのことはすべてその大半が人間との関わりによって生み出されていることを裏付けるものではないだろうか。人との関わりは歴史は自らの足跡の歴史を証するものでもある。言うなれば作品は白居易自らが語る生の証しであり、それゆえに彼は作品に異常なまでの情熱を注ぎ続けたのだと考えるようになった。

白居易の交友関係は実に広くその説明は遅々として進まないが、ふとしたことがきっかけとなって意外な展開を見せることがあり、この永遠の課題ともいえるものも徐々ながら道は開けていきそうである。今回の小論においては、白居易の杭州刺史在任の時期に於ける、特に